

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：32412

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520075

研究課題名（和文） 先駆的共生思想の日英比較研究-エドワード・カーペンターを中心に-

研究課題名（英文） Comparative Study on the Pioneering Cooperation Thought in Japan and Britain —The Thought of Edward Carpenter —

研究代表者 稲田敦子（ATSUKO INADA）
聖学院大学・人文学部・教授

研究者番号：10017585

研究成果の概要（和文）：

共生思想の先駆的系譜に位置づけられるエドワード・カーペンターの思想的基盤を第一次資料に基づき、主として①内発的発展論の基盤、②共同体再編の実践的課題、③ラスキンの固有価値論との関係性の3点を中心に検討し論稿にまとめた。カーペンターは、イギリス資本主義の「構造転換」に連動して、この希薄化をめぐる危機的状況を強く意識し、共生思想の基底となったのであり、石川三四郎の「土民生活」思想に大きな影響を与えることとなった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to examine the pioneering thought on restructuring community expounded by Edward Carpenter (1844～1929). who examined the problems occurring in the modern civilized society of Britain. The papers of this study focused on three points of the thought of Carpenter, 1) the basis of endogenous developing, 2) restructuring of voluntary community, 3) the value orientation by Ruskin.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：比較思想史・共生思想

1. 研究開始当初の背景

エドワード・カーペンターは、研究対象として取り上げられることが少なかったが、近年になってその普遍的課題が見直されている。彼は、近代文明社会の問題の一つを「蘭和が喪失」している状況であると指摘することによって、個と共同性をめぐる問題を中心に、現代における自然との共生および新しい共同体の再編の課題に先駆的に取り組んで

きた。この課題を主題とした博士論文（ケンブリッジ大学）も提出されるようになった。環境の破壊が進み、地球の危機が叫ばれている今日、近代物質文明の「負」の問題を根源的な視点から提起し、自然との共生を求める試論は近年注目され、人間と自然との関係性を本当の意味で問うということは、自然の捉えなおしと同時に、人間の自己自身への問い直しを行うことを意味する。

「人間は危機の時代に自然に回帰する。自己の存在とその基盤がゆすぶられ、脅かされるとき、人はたしかにものを求めて内外の自然のなかにおけいり、その深みを凝視しようとする。」(安永寿延)人間の物理的自然の支配は止まるところのないかのごとくだが、人間的な自然の克服、人間が自分自身を支配するということがどうだろうか、という問いかけは、共生思想を基盤とした思想形成過程を検討する問題意識の射程に入ることとなってきた。

従来の研究史においては、エドワード・カーペンターと石川三四郎の問題提起および各思想は、数的に多くはないが、それぞれが単独に研究対象とされ検討されてきた。カーペンターについては、ルイスによって著作目録がまとめられた後、人物像を描き出した伝記があるが、共生思想を中核とした思想形成過程についての論稿は、断片的である。また石川については、その著作が全集としてまとめられたが、共学舎のパンフレットの一部など未収のものがある。

その中で、両者の思想的接点の内容を検討し思想的影響についての比較考察をしようとする研究はまだ緒についたばかりであり、本研究がその一助となることを課題としている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、比較思想史の観点から、近代文明社会がもたらす「負」の問題を具体的状況からとりあげ、人類の普遍的課題である共生の問題を先駆的に提起しながらも、これまで近代思想史上であまり光の当てられていなかったいわば思想の地下水脈の一路(イギリスのエドワード・カーペンターと石川三四郎)に焦点を当てて両者の思想的接点を掘り起こす試みである。

人間をとりまく自然的、物理的環境と人間集団や人間社会の諸々の相互関係をめぐっては、近代文明が推進されるにつれて、人間社会の生活基盤がおびやかされる状況およびその危機意識と密接に関係している。カーペンターの問題意識は、人間存在の精神的基底としての共同性をめぐる領域において、「機能一役割」的關係から「実体一人格」的關係への再生の可能性をさぐる試みの一つと考えられよう。

カーペンターの主著である Towards Democracy (1883年)の主題は、かつてE.ルイスによって「視点を打ち立てるよりも個人的接触を見出そうとする書物」といわれた。その背景には、カーペンターの思想形成過程で看過できない人間ひとりひとりのなかにある「共同の生」の重視と自由な個の解放が中核にあったといえよう。それはまた人間存在の精神的基礎としての共同性をめぐる精

神的デモクラシーであり、このことは、「個人の人格の普通の原型を超える領域」がくみこまれることを示している。彼の生きた時代は、産業革命後の工業化の進展がもたらす社会の変化に揺れていた時であり、特に工業化の矛盾が集約的に顕在化してきていた。こうした状況下のカーペンターによる思想を石川三四郎は、著作およびミルソープでの地域にねざした共同体の試みに直接参与することにより大きな影響を受け、「土民生活」思想を提唱する。そこでは自然との接点を求め、生産活動に直接的に関わるという主体の理念型として「土民」が提起され、彼らによる地域に根差した共同体再編が示された。

石川およびカーペンターは、ともに厳しい時代状況のなかで近代物質文明についての根源的な問いかけを行い、自己の内と外の「負」の側面を見据えることから共生思想を提起したが、両者の思想的接点の基盤および思想形成の軌跡を検討することを本研究の目的としている。

3. 研究の方法

カーペンターと石川の第一次資料を中心として時代状況をふまえて思想的基盤さらにその形成過程を精査することにより、主要な論点および問題提起を検討し、思想の地下水脈を掘り起こす試みとする。

近年、カーペンターの自然観や共生思想が見直され、彼に関する博士論文や関係資料がシェフィールドのカーペンター文庫および母校のケンブリッジ大学図書館に所蔵されており、現地での第一次資料により論文作成が可能となる。特に、カーペンター・コレクションの書簡類は非常に多岐にわたっており、東洋思想との接点を裏付ける資料はこれまでとりあげられておらず、思想形成の軌跡をさぐるうえでの貴重な資料といえよう。また、石川三四郎との書簡は、カーペンター側とともに、石川に関しては青土社の全集に収録されている書簡類をも読み合わせることで、両者の思想的接点の水脈をさぐるができる。

さらに近代文明批判の極めて象徴的かつ具体的な問題が当時のイギリスの工業都市シェフィールドでの煙害問題であり、カーペンターはその状況がいかに深刻であるかを、はじめて Sheffield Independent 誌に掲載した。カーペンター・コレクションには、マイクロフィルム化されて当時の状況の経緯が明確になっている。シェフィールドの「巨大な濃い雲」の下では、子供はいうにおよばず、十万人の大人が、わずかの太陽と空気を求めて争い、生活基盤が揺るがされた状況が「繁栄」の時代の「蔭」の側面として、端的に示され、具体的な資料がその厳しさを十分に物語っている。

また、石川とカーペンターの思想的接点として共同体の再編への視点が考えられるが、この接点をめぐっての歴史的背景を検討する上で、19世紀イギリスの社会史をふまえ、カーペンターによる「産業の村」構想にみられるオーウェンの思想的影響をさぐることにする。こうした社会思想についての理解を深め、近代日本における影響をあとづけ土着的な思想との接点を追求することにより、共生思想における共同体の再編がどのように変容してきたのかを資料的に跡付ける。

カーペンターによる近代文明批判として強権化した国家による戦時体制に対する明確な批判があるが、それは彼の「十六人宣言」から資料的に明らかである。この姿勢は、近代日本の「冬の時代」にあつて内村鑑三らとともに日露非戦論を思想的な出発点とした石川三四郎の基本的視座とその基底を共にするものであり、資料からも論証できる。

このように、カーペンターと石川の思想的接点およびその思想の形成過程をそれぞれの第一次資料を基盤として検討し、時代状況をふまえて、共生思想の先駆とされている両者の問題提起の内容を、比較思想史の視点をふまえて論稿にまとめることを研究の方法とした。

4. 研究成果

本研究は、人類の普遍的課題である共生の問題を先駆的に提起しながらも、これまで近代思想史上であまり光の当てられていなかったエドワード・カーペンターおよび石川三四郎を対象として、両者の思想的系譜をあとづけその接点を検討してきた。その研究成果を概括すると、両者の共通の問題意識は、社会総体とそれの中の自己を、自然を射程に組み込むことにより、解決の糸口を探ろうとするものである。言い換えれば、「人間的自然」の全体性の回復を「本来的自然」と「社会的自然」との調和的状态において成立させる方策を求めようとしたことであろう。

カーペンターによる調和的社会論は、*Civilization—Its Cause and Cure* (石川三四郎訳『文明—その原因および救治』)に

おいて先駆的に提示された人間と自然との宥和的關係の危機をめぐる近代文明批判が基盤となっている。そこには、「外的」自然と「内的」自然の両側面を認識することにより、双方を危機的状況に陥らせたものに対する鋭敏な意識が見られる。カーペンターは、環境としての自然のみならず人間の本性を内包させる内的自然が全体性を失い、現実的存在感から遊離していくあり方を認識し、さらには、自己内部において、このような状況に歯止めをかける契機を持ち得なくなることへの危機感をつのらせたのである。このこ

とから、人間が自己の存在とその基盤がゆさぶられていく内外の自然の問題が検討されることとなった。

「現実が虚偽と腐蝕の兆候をしめしはじめるとき、しばしば自然がそれに対置される。だが、往々にして危機の時代にはなによりも自然が危機的相貌を呈しはじめるものだ。その背理が人間を混迷させ、危機を生き抜こうとする努力を困憊させる。」(安永寿延)これは、安藤昌益論の冒頭部分であるが、昌益は幕藩体制下にあつて、その矛盾を身を以て受け止め、直接生産にたずさわるあり方を「直耕」という形で積極的にとりこみ、現実の矛盾を内包した集権社会に対置する「自然世」を位置づけた。そこでは、「自然」を危機状態に陥らせた状況に対する強い危機意識が基盤となっている。石川三四郎の思想は、いわば地下水脈として安藤昌益の思想潮流に連なると言えるが、他方、「自然」の危機状態に対する意識および自己自身への内的志向および「負」の側面としての「蔭」認識は、カーペンターとの思想的接点に通じるものがある。

普遍的理念の登場は、その担い手としての自由な個人が主体的に形成されることを要請する。この個人は一方で、共同体的にみられる規制や上下関係などの外的束縛を断ち切ろうとする。しかし、この自由な個人も、彼の存在を支えている構造としての世界システムからは自由ではない。このシステムが発展し、高度化することによって、それまでの生活基盤は解体され、肥大化した社会関係の中で特殊化した状況に封じ込まれ、その結果として、人間の現実的存在感は希薄となっていく。とくにイギリスの「構造転換」に連動して、カーペンターはこの希薄化をめぐる危機状況を強く意識した。

石川とカーペンターとの思想的接点をめぐる問題を明確にしていく上において、石川の思想形成過程を探るということは、近代日本における異文化接触による思想の受容・変容・影響をめぐる諸問題を検討することとなる。このことは、異質の文化を受けとめた近代日本の思想土壌の中で、思想の普遍性と特殊性、連続性と断絶性、また基底にあるものと表層にあるものという二重構造に注目しながら、個と共同性をめぐる問題に対する根源的な問いかけをすることである。

「発展とは、すべての人間のパーソナリティの可能性を実現することを目標とし、貧困と失業をなくし、所得配分と教育機会とを均等にすることである。」と提起したダドレー・シアーズは、いわば外的環境の発展への視座とともに、各個人の内面の主体性に目をむけた内発的発展の可能性を明らかにした。

このことは、「新しい発展の意味」の論稿で、社会的・人間的意味を包括した自助概念

の提起でより明確となった。すなわち、経済面では自給率を高め、文化面におけるそれぞれの固有性を尊重し、その促進をめざし、このことを実現するためには自助努力が必要であり、内発的に自己を内面からたかめていくという志向が示されている。この視点は、内発的発展論の「もう一つの発展」として、外的な発展に対しての人間の内的な発展を強く推し進める自助と共生の提示となるものであった。

ものづくりと消費文明に行き詰まり、自然環境と人工環境が敵対関係に入り込んでいく状況の下で、カーペンターは、自己の内と外における「負」の側面を見据える視点から共生思想を提起していった。その問題提起が石川三四郎にも大きな影響を与えたのである。こうした両者の共通項には、多様な固有価値論が窺える。そこでは、主体の問題にあわせて、文明の個性的継承の視点から地域の各個性と内発的発展および地域の固有価値を相互に生かしあう発想に展開されていくものである。このような展開にもつながる両者の思想的接点および共通項を第一次資料から明らかにしたことは、研究の成果といえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1 稲田敦子 「内発的発展論の思想的基盤—ミルソーブ時代のエドワード・カーペンターをめぐる—」査読無『聖学院大学論叢』第23巻2号pp. 57-67, 2911年

2 稲田敦子 「近代文明批判における「蔭」認識—石川三四郎とエドワード・カーペンターの思想的接点をめぐって—」査読無『聖学院大学論叢』第24巻2号pp. 55-64, 2912年

3 稲田敦子 「転換期イギリスにおける先駆的内発的発展論—エドワード・カーペンターの試論をめぐる—」査読無『聖学院大学論叢』第25巻2号pp. 27-40, 2913年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲田敦子 (ATSUKO INADA)
聖学院大学・人文学部・教授
研究者番号：10017585

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし